Japanese Association for Religious Studies

『強仁状御返事』に「仍て予、正嘉・文永二ヶ年の大地震と大長星とに驚て、一切経を開き見るに、此の国の中に前代未起の二難あるべし。いわゆる自他返逼の両難なり」(定一一二二頁・真蹟現存・原漢文)とあり、日蓮滅後四十～五十年頃の成立とされる『法華本門宗要抄』に「日蓮此の事を見て駿河の国岩本の経蔵に容り諸経論を引て之を勘う」(定二一六〇頁・原漢文)とある。この経蔵には智証大師円珍が唐より請来した一切経があったとされ、ここで伯耆房日興が入門したという。

以上から、正嘉元年の鎌倉大地震を契機として岩本実相寺の経蔵に入り、鎌倉の草庵と行き来して、文応元年に『立正安国論』を書き上げたと推測できる。そして、七月十六日に奏進された。また、五月二十六日稿了という宗門の所伝があることを紹介しておきたい。

西田の場所的論理とカントの対象論理

――妥当ということ――

岡　廣　二

西田の場所的論理は通常の対象論理とその立場を異にする。対象論理が主客相対からなる論理であるとすれば、場所的論理は主客合一からなる論理なのである。この場所的論理から見れば、カントの「コペルニクス的転回」を証示する「純粋悟性概念の超越論的演繹」は問題と思われるのである。カントは形而上学の再建には経験に依存しない純粋な綜合判断が必須であると考え、その範例を純粋自然科学上の実験的手法に見出した。即ちカントは直観の多様を主観内在のカテゴリーの下に総合し諸表象との結合によって客観的対象は認識され、法則的規定が可能となると考えたのである。そして純粋な綜合判断は普遍的・必然的でなければならないから、カテゴリーは経験に由来しない経験に先立つアプリオリなものでなければならないと主張したのであった。アプリオリとは悟性が恣意的経験からではなく悟性自身から根源的に獲得したものの意味である。ところで、場所的論理はすべてのものが純粋経験から成り立ち、直接経験から生成せるものと見る。従ってカテゴリーもその例外ではありえず、純粋経験即ち「意識するということはとにかく範疇的〝有〟以前になければならぬ」とするのである。カテゴリーはいわば〝考えられたもの〟であり〝有〟であって、純粋経験の自己展開の一結果に過ぎない。それは決して「根源的獲得」ではなく過程的・派生的なものなのである。カントはカテゴリーがなぜ客観的に妥当するのかの演繹に苦労したが、それは真実在の次元に立脚せずして派生的境位から考究しているからである。端的に云ってその考えかたが対象論理であるからカテゴリーの妥当性が問題となったのである。カントの立場は「認識論的主観主義」と云われているが、「コペルニクス的転回」も客観に従う主観ではなく逆に客観を構成する主観の謂いなのであるから、その思惟的変革が主客対立を前提としていることは自明である。これに対し場所的論理は主客相対ではなく、その手前の主客未分を立脚地としてそこから主と客への分

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

立を説き、その主客の形成がそのままで認識の成立であると云うのであるから、認知の形成それ自体がそのまま妥当なのである。真実在の次元では「現前の意識現象と之を意識するといふことは直ちに同一であって、其間に主観と客観とを分つこともできない、事実と認識の間に一毫の間隙がない」のであるから、これ即ち妥当ということなのである。つまり、対象論理では「主観と客観」「事実と認識」とが別に考えられているから認識の客観的妥当性が問題になるのであるが、場所的論理は主客未分の経験の主と客への共なる分裂こそ認識に外ならないと見るのであるから、はじめから物事は妥当しているのである。かくて西田は「カントのいうように形式と材料と合一した所に客観性があるのではなく、この両者の未分以前にあるのである」と評するのである。敷衍すれば、カントは認識の根源に規範的な「意識一般」を構想したが、西田からすればこれも「意識された意識」であって真の認識主体としての「意識する意識」ではない。「意識一般」という概念名があるということは既に客体化され意識されたということであって、それは断じて主体ではない。「意識一般」の此岸を超脱してそこから己を省みて「意識一般」と命名している真の「意識する意識」が把握されていない。それゆえカントの「意識一般」は「対立的無」とは言えても「絶対無」となすことはできないのである。まだ見られる立場を残しており、不徹底と云わざるをえない。

鈴木大拙と『大乗起信論』

嶋本浩子

鈴木大拙（一八九〇―一九六四）は禅思想を海外に紹介したことで有名であるが、彼の最初の英文著作は、一九〇〇年にアメリカで出版した『大乗起信論』の英文翻訳であった。『大乗起信論』はインドの馬鳴造作の大乗仏教論書であるが、『中論』を著した龍樹と時代が変わらない。しかし、その思想的影響力は、印度の仏教ではなく、中国の仏教の発展に大きく寄与した。すなわち、中国で発展した天台、真言、華厳、禅・浄土の各思想の教義の根幹に寄与していることから、思想は中国の仏教に大きな影響を与えた。特に、天台宗における本覚思想の基本をなすのは『大乗起信論』に述べられている衆生心である。

大拙の基本思想は、即非の論理、『臨済録』からの人思想としての超個と個のあり方、霊性、無分別の分別、真空妙用と言われるが、それらの大拙が示した言葉の基本は、空からの「はたらき」を重視している。なかでも、真空妙用が意図するところは、空からのはたらきが、人智を越えた絶妙な調和の取れたはたらきであることを表現している。これを『大乗起信論』では、不思議業相とよんでいる。『大乗起信論』が意図する「不思議業相」は、空からのはたらきが絶対的であることを示し、妙のあり方の基本的概念を表わしていると考えられる。さらに、大拙が英語で「はたらき」を述べるとき、being is becoming,

NII-Electronic Library Service